

日本語によるディスコース

組織ディスコース研究部会

増田 靖 (ますだ やすし) 光産業創成大学院大学

主査 高橋正泰 (たかはし まさやす) 明治大学

幹事 四本雅人 (よつもと まさと) 長崎県立大学

1. はじめに (高橋正泰・四本雅人)

ヨーロッパを中心に、近年ではアメリカでも「ディスコース」への関心が社会科学において高まりつつある。ディスコース分析においては、実体概念から関係概念へと捉え直すことによって、人々がどのように意味世界を構成するのか、そして、社会的行為がどのように生成されるのかを明らかにすることが可能になる。こうした方法論・分析手法をもって、昨今の多様化する組織現象、および情報の調査分析を進展させることで経営学のさらなる発展に資したいと考え、2005年からの「組織と情報技術への解釈的アプローチ研究部会」、2007年からの「言語派組織情報研究部会」を前身とし、2011年に「組織ディスコース研究部会」として発足した。なお、研究部会メンバーは本研究部会を「IMI (=意味) 研究会」と呼んでいる。

2. 研究部会の活動内容 (高橋正泰・四本雅人)

研究部会の具体的な活動としては、研究会 (研究発表会) の開催と、経営情報学会全国発表大会での研究部会セッションや個別のワークショップ、シンポジウムの開催などを行っている。

また、本研究部会のメンバーにより、David Grantら (2004) の編集による *The SAGE Handbook of Organizational Discourse* を翻訳し、『ハンドブック 組織ディスコース研究』として、2012年に同文館出版より出版。2019年には『組織のディスコースとコミュニケーション: 組織と経営の新しいアジェンダを求めて』(清宮徹) を同文館出版から、そして、「経営組織論シリーズ」『マクロ組織論』(監修: 高橋正泰, 編著: 高木俊雄・四本雅人), 『ミクロ組織論』(監修: 高橋正泰, 編著: 竹内倫和・福

原康司), 2020年には同シリーズ『組織のメソドロジー』(監修・編著: 高橋正泰, 編著: 大月博司・清宮徹) を学文社から出版した。

現在は、David Boje (2008) の著書 *Storytelling Organizations* に注目し、増田靖・高橋正泰を監訳者として翻訳作業を行っており、2023年春に同文館出版より『語る組織—ストーリーテリング・オーガニゼーションズ—』のタイトルで日本語版を出版予定である。この『語る組織』について、翻訳に至る経緯や翻訳における「日本語によるディスコース」について、監訳者の1人である増田靖先生に以下を執筆してもらった。

3. Boje (2008). *Storytelling Organizations* の翻訳から考える「日本語によるディスコース」(増田 靖)

2019年末からの新型コロナウイルスの感染拡大により、人間社会はこれまでの行動様式を深く内省し、それを改めざるを得ない状況に追い込まれた。ワーク・ライフ・バランスの実現を目指して、かねてより働き方改革が推進されていたが、皮肉なことにコロナ禍の影響によりリモートワークなどそれに資する働き方が広く普及することになった。一方、外出自粛や三密回避などの施策で、人間社会の基底にある対面での接触が極端に制限されるなど、強い精神的負担を強いられることとなった。

こうしたなか、ウィズコロナ、アフターコロナに向けて、さまざまな取り組みが行われてきたかと思うが、筆者は仲間を集い、組織ディスコース研究部会の一環として Boje (2008) *Storytelling Organizations* の翻訳プロジェクト (出版までめざす) を立ち上げた。理由としては、Boje (2008) の研究アプローチが筆者のそれに親和性が高く、かねてから関

心があったことが挙げられる。そして、コロナ禍の環境が後押ししたといえるであろう。しかし、それだけではない。以下に示す理由がある。

ひとつは、Boje (2008) が提起する、「語る組織／騙る組織」と訳せる *Storytelling Organizations* という現象を研究し、かつコンサルテーションするための理論と方法論が、日本的経営とも呼ばれた家族経営主義が崩壊していくなか、コロナ禍に襲われた日本社会において、アフターコロナの時代の新しいコミュニティの形成に向けて大きな示唆を与えているからである。

もうひとつは、Boje (2008) が Boje (2001) から¹⁾ 展開している、Narrative と Story をめぐる独自の「ディスコース」から多くが学べること、またその「ディスコース」が Boje (2008) をはじめ英語話者が駆使する「英語によるディスコース」に対して、日本語話者は「日本語によるディスコース」を研究、実践していく必要があること、そしてその実践に意義と価値があることを認識させてくれるからである。

本稿は、2つ目の理由として挙げた、Narrative と Story をめぐる Boje (2008) 独自の「ディスコース」を中心に論じる。しかし紙幅の関係で十分な議論はできない。この点については、増田 (2022) で詳細な議論を行っている。関心のある読者はそちらも参照されたい。

ナラティブやストーリー、ストーリーテリングは、すでに日本語として認識され、研究に限らず実務でも多用されている。一般に、ナラティブもストーリーも、アリストテレスの概念規定に基づき「始まり・中間・終わり」(Beginning, Middle, and Ending: BME) があり、筋を持つ、日本語では「物語」と呼ばれるものと同義の概念として理解されている。しかし現在日本では、ナラティブ・セラピーや社会構成主義の影響もあり、「BME 型の筋のある出来事による物語」という両者にとっての本来的な含意はストーリーが保持し、ナラティブは「語ること」という意味が強調されて、別な概念として研究や実務現場で用いられている²⁾。

しかし Boje (2001, 2008) では、Narrative は伝統的なナラトロジー(物語論)に基づく「BME 型の筋のある出来事による物語」であるという認識に留まる。それならば、どこが Boje (2008) 独自の

「ディスコース」なのか、と訝られるかもしれない。ところが、ここからが独特な展開となる。Boje (2001) では、「Antenarrative (アンテナラティブ)」という概念が提唱される。Antenarrative とは、伝統的な Narrative がナラトロジーの理論に従い筋を持ち、また登場人物を含め首尾一貫性を備えたものであるのに対して、断片的で、曲りくねり、矛盾し、寄集め的で、筋立てのない、物語を構成する以前の賭けのような思惑のことである (p. 1)。「Ante」は「前」という意味であり、またポーカーの用語で札を取る前に掛け金を出すという意味がある。Boje (2001) はこれに掛けて Bet (賭け) という意味も持たせている。

しかしここで重要なことは、Boje (2001) が「Antenarrative」と造語しないと、その概念を含意する言葉、単語が英語には存在しないということである。また、この「Antenarrative」の定義は、日本語では物語を構成する以前の「語り」という概念が包含しているものといえる。つぎにここで面白いことは、英語話者の Boje (2001) が「Narrative (物語)」に対して日本語なら「語り」という概念で議論できるところで、「Antenarrative」という新語を造らざるを得ないのに対して、日本語話者は「物語」と「語り」という概念を古くから持っているにもかかわらず、「ストーリー」と「ナラティブ」という概念を用いて議論しているということである。Boje (2001) も独自の「ディスコース」を展開しているといえるが、日本語話者も「カタカナ語による独自のディスコース」を展開しているといえなくもない。和製漢語や和製英語で日本語の幅を広げ、日本語を豊かにしてきたことは否定できない。しかし、安易な「カタカナ語によるディスコース」は、先に触れた「日本語によるディスコース」をそのまま含意するのではなく、その一部を構成するものであるということに留意する必要がある。

さて、話を Boje (2001) から Boje (2008) へ進めよう。Boje (2008) では、さらなる独自の「ディスコース」が展開される。Boje (2008) は、第1部のはじめにでつぎのように述べている。

「本書の主要命題は、ナラティブが近代化の過程で、統制と秩序の(求心的な)中心化の力になったということである。それに対抗する力がストーリーである。ストーリーは、(ナラティブ的秩序に完全

には屈していないときに)多様性と無秩序の(遠心的な)脱中心化の力を構成できる。ナラティブは、抽象化と普遍性を求める近代化によって影響されてきた。一方、ストーリーは、ここかしこで、生活世界とその生成力と強く相互作用し、かつ生成し続けてきた。(中略)組織研究者は、(中略)始まり・中間・終わり(Beginning, middle, and end: BME)という完全に線形で完結するプロット構造を持つアリストテレス学派のナラティブに注目してきたのである」(p. 1)。

このBoje (2008)の「ディスコース」から理解できることは、彼の認識では、近代以前はNarrativeもStoryも日本語でいうと「BME型の筋のある出来事による物語」であったが、近代化の過程で方向性が分岐し、とくにStoryは「BME型の筋のある出来事による物語」の性質から大きく逸脱したということである。先に触れたように、現在の日本語話者にとっては、Boje (2008)のStoryほどではないが、「BME型の筋のある出来事による物語」の性質から離れていったのは、Narrativeのほうである。Boje (2008)のStoryに関する解釈は英語話者の理解を代表しているわけではないが、Narrativeに関しては概ね英語話者の共通認識といえるであろう。その意味では、日本語のカタカナ語による「ナラティブ」は特別な意味が付与された、原語とは異なる和製単語ということになる。一方「ストーリー」は「BME型の筋のある出来事による物語」として日本で市民権を得ている。Boje (2008)のStoryとNarrativeの概念規定とは真逆の解釈といえるであろう。

そうした現在の日本の言語空間において、先の引用のようにBoje (2008)のNarrativeとStoryを「ナラティブ」と「ストーリー」というようにカタカナ語で訳すとすると、大きな混乱を生むか、そもそも受容されない可能性がある。タイトルに使われている「Storytelling」も同じである。現在の日本語話者は「ストーリーテリング」という概念を、Boje (2008)とは異なる概念規定をしている英語話者による書籍などから受容しているからである。

先にBoje (2008)の翻訳プロジェクトを立ち上げた理由を挙げたが、同書が提起する現代社会の問題と、それに対応する実践への理論と方法論は、アフターコロナ時代の日本社会における新しいコミュ

ニティの形成に対して大きな示唆を与えてくれる。それゆえ、翻訳により日本語の言語空間で受容されないものになってしまっただけでは意味がない。日本語話者の読者に同書の主題と内容をしっかりと理解してもらわなければならない。

そこで、翻訳プロジェクトでは、最近の日本語の言語空間における英単語のカタカナ語化による翻訳ではなく、平たくいうと単語単位の「意識」を行うことにした。Narrativeは「物語」と、Boje (2008)の概念規定によるStory, Storytellingは「語り」と訳すことにした。カタカナ語化しないという意味で「意識」といったが、「物語」に関しては「直訳」でもある。「物語」も「語り」も明治以降に西洋語を受容するために造られた用語ではない。いずれもやまとことばであり、古くから使われている。さらに「物語」は語源や発生は異なるが、アリストテレス以来のNarrativeやStoryの概念と同義とってよい概念である。そして「語り」の概念は、Boje (2001, 2008)がAntenarrativeを造語し、StoryやStorytellingに特別な意味に置き換えてまで表現したかった概念を包含している。

因みに、先に引用したBoje (2008)の「ディスコース」における「ナラティブ」と「ストーリー」を「物語」と「語り」に置き換えてみると、つぎのようになる。

「本書の主要命題は、物語が近代化の過程で、統制と秩序の(求心的な)中心化の力になったということである。それに対抗する力が語りである。語りは、(物語的秩序に完全には屈していないときに)多様性と無秩序の(遠心的な)脱中心化の力を構成できる。物語は、抽象化と普遍性を求める近代化によって影響されてきた。一方、語りは、ここかしこで、生活世界とその生成力と強く相互作用し、かつ生成し続けてきた。(中略)組織研究者は、(中略)始まり・中間・終わり(Beginning, middle, and end: BME)という完全に線形で完結するプロット構造を持つアリストテレス学派の物語に注目してきたのである」(p. 1)。

「物語」と「語り」を用いた訳文では、NarrativeとStoryは同義語だと信じている英語話者に向けたBoje (2008)の「ディスコース」の表層的な狙いと意味は綺麗に拭き去られているが、Storyが本来含意する「BME型の筋のある出来事による物語」と

いう性質から逸脱させてまでして表現しなかった(英語話者に限らずすべての語り手の)語り現象の存在に気づかせる「ディスコース」の深層的な狙いと意味は鮮明になっているであろう。そして、この日本語があるものは日本語に訳すという方針は、Boje (2008) の翻訳プロジェクトを立ち上げた3つ目の理由にも関係している。

Boje (2008) は、Storytelling Organizations という現象を研究し、よりよい組織やコミュニティを形成していくためにコンサルテーションすることを提唱しているが、それらはすべて英語話者による「英語によるディスコース」として実践されている。ここで、本稿の第3段落の冒頭で、『語る組織／騙る組織』と訳せる Storytelling Organizations という表現を用いたことを思い出してほしい。Boje (2008) は、Storytelling Organizations の Storytelling に「語る」と「騙る」の両方の意味を持たせて使用している。同書で紹介されている Storytelling Organizations は、まさに企業の社会的責任が問われる、消費者や従業員、社会を騙し、たぶらかす「騙る」組織なのである。一方その Storytelling Organizations は、経営支配層から抑圧された従業員をはじめとするステークホルダーがそれに対抗する多様な思いや考えを語り出せないでいるが、時にはその生の現場の「語り」が創発する「語る」組織でもあるのだ。

日本では「ストーリーテリング」は、戦略の浸透や共通目的の醸成、チームビルディング、ビジネス・ピッチなどへの適用という経営管理上の肯定的な面で受容されているが、Boje (2008) による Storytelling の概念規定は、「語り」と「騙り」である。そのため、Boje (2008) は孤軍奮闘して Story と Narrative を区別する「英語によるディスコース」を展開したが、日本語には、その Boje (2008) の用語と概念を輸入せずに、古代からやまとことばとして「かたり(語り／騙り)」ということばがある。

そこで、この翻訳プロジェクトでは、Boje (2008) の「ディスコース」の深層的な狙いと意味をよりよく理解できるようにするためだけでなく、Boje (2008) が提起した、よりよい社会の形成のために「日本語によるディスコース」の研究と実践を展開する手がかりとなるように、「物語」と「語り」という用語を用いることにした。

以上の通り、Boje (2008) が展開した「英語によるディスコース」を「日本語によるディスコース」によって日本語の言語空間へ移設したことを論じた。このプロセスは、Boje (2008) が理論構築の際に基底とした理論のひとつである Bakhtin (1965) のカーニバル的世界感覚における民衆的な笑いの死と再生のプロセスを援用したものであるといえる。

Boje (2008) の日本語版は、2023年の春に上梓の予定である。同書は経営情報学をはじめ、社会科学の研究と社会的実践において有益な理論と方法論を提供している。ぜひとも蔵書的一端に居場所を与えていただきたい。

注

- 1) ジャーナル論文としては、それ以前に発表されたものは多数ある。
- 2) SIGNAL BANANA (<https://signal.tokyo/howto/1539>) 2021年9月18日閲覧, リタリコ仕事ナビ (<https://snabi.jp/article/174>) 2021年9月18日閲覧, エレミニスト (<https://elemnist.com/article/788>) 2021年9月18日閲覧, カオナビ (<https://www.kaonavi.jp/dictionary/narrative/>) 2021年9月18日閲覧。

参考文献

- [1] Bakhtin, M., *Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и ренессанса*, Москва: Художественная Литература, 1965. (川端香男里訳『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房, 1995年)
- [2] Boje, D. M., *Narrative Methods for Organizational and Communication Research*, London: Sage, 2001.
- [3] Boje, D. M., *Storytelling Organizations*, London: Sage, 2008.
- [4] 増田靖『『語る組織論』序説—Boje (2008). *Storytelling Organizations* から考える言語論的課題と展開—』『明治大学経営論集』第69巻, 第1号, 2022年, 189–223ページ。

組織ディスコース研究部会連絡先

連絡先: 幹事・四本雅人(長崎県立大学)

E-mail: res.soshiki@jasmin.jp